社会科学習指導案

授業者　土井　百々奈

「日本の工業生産」
～できていることから考える～

１．学年・組　５年南組

２．目指す子供の姿

社会科の学びを通して、社会参画意識すなわち社会をつくる力を養うことを目指す。そのためには、自分たちが生活している社会を知ること、自分から社会へとアウトプットの関わりをつくることが必要である。よって、社会を知る＋社会とつながる＝社会をつくる力が成り立つと考える。本単元においても、この考え方に沿って学習を組み立てる。まず、貿易と運輸について知る（社会を知る)。そのうえで、貿易と運輸が抱える課題に対して、解決策を提案したり実現に関与したりする（社会とつながる）姿を引き出す。このように社会を知ることと社会とつながることが往還することによって、社会参画意識が養われていくと考える。なおこの過程では、子供が社会的事象を自分事として捉えることができているか、多角的に考察することができているかを見取りの手掛かりとしたい。これらを見取り重ねていくことが、目指す子供の姿の実現につながっていくと期待している。

３．本単元における学びを紡いでいく子供の姿

本単元において目指す子供の姿、すなわち社会参画意識（社会をつくる力）を養うことをねらいとし、社会を知ることと社会とつながることを一体のものとした問題解決的な学習を進めていく。まず貿易と運輸に関する社会的事象から問いを見出し、自分事として受け止める。そのうえで、これまでの経験や知識をもとに予想し、学習の見通しをもつ。そして、消費者である自分たちと、社会を支える人々といった複数の立場、あるいは環境・安全・過去・未来などといった複数の視点から、社会とどう関わっていくのかを自分で選び、判断していく。こうした一連の流れこそが、学びを紡いでいく子供の姿である。この学びが実を結べば、自分にできることを考えて行動しようとしたり学んだことを家族や友達に話したり、ニュースに目を向けたりするようになるだろう。そうした姿を、社会参画意識が養われた具体的な姿として期待している。

そのうえで大切にしたいことが二つある。一つ目は、多様な他者の考えを認め合うことである。例えば、問いに対して社会の仕組みに目を向ける子供もいれば、それを支える人々の思いに目を向ける子供もいるだろう。その時、違う考えを間違いだと決めつけるのではなく、共感したり自分の考えを再構成したりする機会としてほしい。これは学びを紡ぐきっかけの一つとなると考える。二つ目は、一人では難しいこともみんなで協力すれば大きな力になると実感することである。社会が抱える課題を解決することは簡単ではない。しかし、知ったことを話し合ったり自分たちにできることを考えたりし、表現する中で、「協力すれば何かを変えられるかもしれない。」という希望をもってほしい。以上の二つは、これからの社会を支えていく子供たちに必要な姿勢であると考える。また子供同士の関係性によっても左右されるため、本単元だけでなく、一年間の学習や学級経営を通して育んでいきたい。

４．本単元で扱う材

（教材について）

本単元では、「わたしたちの生活と工業生産」の中の小単元「工業生産を支える運輸と貿易」を取り扱う。本単元を通して、運輸と貿易は、工業製品を各地に届けたり日本の工業生産に必要な燃料や原材料を確保したりするなど、工業生産にとって重要な役割を果たしているという中心概念を子供たちに捉えさせたい。

本単元の教科書を見ると、運輸と貿易を支える人々の存在を感じることのできる資料が少ないと感じている。しかし、実際には運輸と貿易を支える人々は数多くおり、そのおかげでわたしたちが欲しい物が世界中からすぐ届くという便利な生活が成り立っている。そこで本単元ではヤマト運輸で働く人との出会いを設定する。環境・生活・経済のそれぞれによりよい物流を目指すヤマト運輸の取り組みを知ることを通して、「わたしたちの便利な生活は、たくさんの人々や仕組みによって支えられている。」「便利さだけでなく、環境のことも考えていてすごい。」等といったように、社会を知り考える機会となるだろう。

ただし、本単元で子供に捉えさせたいのは、運輸だけでなく貿易までを含めた工業生産を支える仕組みである。日本は、工業製品を作るために必要な燃料や原材料の多くを海外からの輸入に頼る一方で、作りあげた製品の多くを外国に輸出している。しかし、貿易は運輸に比べて子供にとって実感しにくい面があると考える。そこで、特別活動等の時間に貿易ゲームを行い、国同士のやり取りを体験することを通して、貿易を身近なこととして感じさせたい。身近な運輸を支える人々の存在や思いに気付いた子供が、そうした経験を重ねながら、外国とのつながりにも少しずつ目を向けていくことができるようにしたい。

（材について）

本単元で子供が毎時間抱く「なぜ～？」「どうして～？」という問いが材であると考える。社会的事象に出会い、自分の経験や知識を基に予想し、複数の立場や視点から考えようとする中で、問いを見出していく。この一連の過程は教師の手立てなしでは起こり得ず、同時に子供自身の「もっと知りたい。」「どうしてだろう。」という興味や課題意識なしにも起こり得ない。つまり社会科では連続して生まれる問いそのものが材であると捉えることができる。

子供たちは本単元に入る前から、食料生産の学習で輸出入について考えていたり、自動車の学習では電気自動車の例としてヤマト運輸のトラックに触れていたりする。こうした既習事項があることで、子供の中には運輸や貿易に関する知識や経験がすでに蓄積されており、本単元に入った時点で、問いを見出すための土壌が整っていると考える。

本単元の導入では、教師が実際にインターネットで注文したものが届く流れを紹介する。日常的に体験している「注文したものがすぐ届く」という出来事を共有することで、「なぜすぐ届くのかな？」「当たり前だと思っていたけど、当たり前じゃないのかもしれない。」と考え始める。ここで生まれた問いは単に子供が思いついた疑問ではない。運輸と貿易の仕組みや支える人々の存在に目を向けさせたいという教師のねらいと、子供の興味や課題意識と重なり合ったからこそ、生まれた問いである。そのため、本単元の導入では、「注文したものがわたしたちのもとへすぐ届くのはなぜなのかな？」という材が立ち上がるだろう。

５．評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
貿易や運輸は、原材料の確保や製品の販売において、工業生産を支える重要な役割を果たしていることを理解することができる。	交通網の広がり、外国との関わりなどに着目して、貿易や運輸の様子を捉え、それらの役割を考え、表現することができる。	社会的事象について、主体的に学習の問題を解決しようとする態度や、よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする態度を養うことができる。

６．単元計画

次	時	学　習　内　容	子供の姿 予想される子供の姿
1	1	注文したものがわたしたちのもとにすぐ届くのはなぜなのかな？【本時】	２４時間対応してくれる人がいるからかな。移動が速くなる工夫があるんじゃないかな。
	2	学習計画を立てよう。 学習問題「運輸と貿易は、わたしたちの生活とこれからの社会にどう関わっていくのだろうか？」	注文してから届くまでの流れが知りたい。どうやって運んでいるのか知りたい。
	3	どの輸送手段が一番いいのかな？	一番速いのは飛行機だけど、大きいものは運べないかな。トラックをよく見るから便利なんだと思う。
	4	ヤマト運輸で働く人に話を聞こう。	働く人たちはたくさんの工夫をしているんだな。運ぶだけではなくて、環境のことも考えていてすごい。
	5	便利さと環境への優しさは本当に両立できるのかな？	ヤマト運輸の人たちの努力があるからできる。外国からものを届けるには、燃料が必要だから環境に悪いのかもしれない。
	6	貿易のメリット・デメリットは何だろう？	世界中から必要なものが届くことがいいところ。外国と良好な関係が必要。輸送することで、地球温暖化が進んでしまうかもしれない。
	7	日本の運輸と貿易はわたしたちの生活をどのように支えているのかな？	日本国内だけでは、私たちの生活は成り立たない。たくさんの人々のおかげでわたしたちは便利な生活ができる。
	8	日本の運輸と貿易は、１０年後どのようになっているのだろう？	働き手が不足しているので、今よりも届くまでに時間がかかりそう。技術が発展してロボットが活用されるのでは？私たちにもできることがある。

７．子供が学びを紡いでいく過程〈他者との関わりによる材の変容に着目して〉

本単元の導入となる第１時では、「インターネットで○○を買ったことがある。」「○○会社の人が届けてくれた。」といった自分の経験やイメージをもとに材が立ち上がりやすいと考える。これは物が届くという社会的事象が身近であることに加え、前単元のヤマト運輸の電気自動車や食料生産における輸出入の学習といった既習事項が土台としてあるためである。宅配便の取扱個数が年間約５０億個にのぼるという事実を示し、たくさんのものを運ばないといけないのにすぐ正確に届いているということを実感するだろう。そこで、「注文したものがわたしたちのもとへすぐ届くのはなぜなのかな？」という問い、すなわち材が立ち上がる。例えば、A さんは、「AI が自動で管理しているのではないか？」と社会の仕組みに着目した問いをもつ。そこへ B さんの「トラックの運転手さんが毎日同じ道を覚えて運んでいるのではないか？」と人に着目した問いに A さんが触れることで、人の存在にも目を向け直すかもしれない。一人一人の材が友達の一言をきっかけに運ぶ人に視点が集まった共通材が生まれると考える。合わせて第１時では、「もっと早く届けてほしい」「今のままで大丈夫」という現状に対する子供それぞれの立場の違いにも触れさせ、速さだけでなく正確に届くというよさにも目を向けられるようにしたい。第２時は、第１時で立ち上がった一人一人の材を学級で見つめ直し整理する時間と位置付ける。多角的に社会的事象を見ている子供たちの考えを、本単元で解決したい学習問題として統合し、以降の学びを紡いでいく起点とする。合わせてヤマト運輸の方への質問もこの時間に考えさせたい。第３時では、「どうやって運んでいるのか知りたい」という問いのもと、輸送手段に注目させる。ある子は「一番速いのは飛行機」と考える一方、別の子は「身近でよく見るから、トラックが一番運びやすいのではないか？」と考えるだろう。この違いに触れることで、子供たちは何を一番大切にするかという価値判断によって、ものの見え方が変わることに気付いていく。第４時、ヤマト運輸で働く人に話を聞く中で、「はやく正確に届けること」に価値を置いていた子供が、「環境のことも考えて運んでいるなんてすごい。」と話す友達の言葉に触れ、個の材に環境という新しい視点を取込んでいく姿が見られるだろう。社会の仕組みを知ることから、自分はどう関わっていきたいかという社会とつながる視点への変化がここで起こると考える。第５時では、便利さと環境への優しさは両立できるのかということについて議論する。それぞれの見方や考え方が対立すると考えられるが、この対立を通して、「自分たちにできることはないか？」という両方を大事にしようとする共通材が生まれることを期待する。また、外国から運ばれてくるものもあることに気付いた子の発言をきっかけに、貿易について考える必要性が全体に広がっていくだろう。第６時では、貿易のメリット・デメリットを考えさせたい。「外国のものを買うことができて嬉しい」と捉える子と、「環境に良くないのではないか？」と捉える子の両方の考えに触れることで、国内だけでなく外国の視点も含めた、よい広い視野で運輸と貿易を捉え直していく。第７時では、これまでの学習や友達との対話を振り返りながら、運輸と貿易がわたしたちの生活をどのように支えているのかを改めて自分の言葉で表現する。そして、第８時では、２０３０年にはトラックの輸送能力が３５％不足する可能性があるということに触れ、「今の便利さがずっと続くとは限らない。」という危機感を友達と共有しながら話し合う。その中で、「買うものによってインターネットを利用するか、直接お店に行くか考えるようにしたい。」「荷物を受け取る時にありがとうございますと伝えるようにしたい。」という考えが共通材となるのではないかと考える。この友達との関わりを通して材を捉え直し続ける過程こそが、本単元における学びを紡いでいく子供の姿であり目指す子供の姿である社会をつくる力へとつながっていくことを期待する。

８．本時の目標

・これから学習していく運輸と貿易について、今までの経験や知識をもとに自分の考えをもつことができる。【主体的に取り組む態度】

９．本時の展開

１．教師が経験したインターネットでの買い物についての話を聞く。

・家族もよくインターネットで買い物しているな。
・家にいない間に届いて、再配達したことがあるよ。
・すぐ届いて便利だと思う。なんでこんなすぐに届くのかな？

２.「注文したものがすぐに届くのはなぜだろう？」本時の問いの予想を考え、話し合う。

・全国に同じ倉庫があるのかな。
・インターネット上で管理されているのかな。
・運転手さんが速く移動できるような工夫があるのかな。

３.現状についてもっとはやい方がよいのか、もっとゆっくりでよいのか考え、話し合う。

・毎回はやく届くわけじゃないから、ちゃんと来てほしい。
・みんなが時間を指定すると運転手さんが大変だから、ゆっくりでいい。
・今のままで十分だと思う。

４.振り返りを書く。

・すぐに届くのが当たり前だと思っていたけど、ちがうのかもしれない。
・外国から届くこともあるから、どうやって届くのか知りたい。
・物が届くまでにたくさんの人がかかわっている気がする。

他者との関わりと材の変容

子供の考えは社会の仕組みと支える人に分かれるだろう。共感や納得する姿が見られると予想するが、特に身近である「運ぶ人」についての経験やイメージが共有されやすい。よって「運ぶ人」に関する共通材が生まれると考える。

それぞれの経験や当事者意識によって立場は変わる。自分と他者の考えの違いによって、なぜなのかな？と聞きたくなったり、自分の考えを捉え直したりする姿が見られるだろう。

見取り：今までの経験や学習をもとにして、社会的事象を自分事として捉えることができているか、また多角的に考察することができているか。

１０．座席表

前

１	２	９	１０	１７		１８	２６	２７
３	４	１１	１２	１９		２０	２８	２９
５	６	１３	１４	２１		２２	３０	３１
７	８	１５	１６	２３	２４	２５	３２	３３

１１．参考文献

・唐木清志, 2023, 「社会科の問題解決的な学習とは何か」

・小林尚朗, 篠原敏彦, 所康弘, 2023, 「貿易入門第 2 版世界と日本が見えてくる」